

違いが豊かさとして響き合う社会をめざして

「違いが豊かとして響き合う」。この言葉は、今から 19 年前、1998 年に改定された「川崎市外国人教育基本方針」に記述されている言葉です。11 月 17 日に行われた「第 8 回 川崎市姉妹友好都市国際教育交流シンポジウム」は、私に。この言葉を再び思い起こさせました。

このシンポジウムは 5 年ごとに開催されます。今年のテーマは『『ともに生きよう ちがいをこえて』～未来を生きる子どもたちのために～』でした。

現在、教育交流をしている川崎市の友好姉妹都市は、クロアチアのリエカ市、アメリカのボルチモア市、中国の瀋陽市、イギリスのシェフールド市、韓国の富川市、そして今回参加できなかったオーストラリアのウーロンゴン市の 6 都市です。

各都市が発表した教育施策は、実にさまざまでした。例えば、クロアチア・リエカ市では「子どもにやさしい町・リエカ」を合言葉にインクルーシブ教育に取り組み、中国・瀋陽市では、毎年多額のお金をかけて学校を建設し、今後は都市部と農村部の格差解消に取り組むという発表内容でした。また、イギリス・シェフールド市では、アカデミー学校が設置され、厳しい評価が行われるようになり、教員や生徒のストレス障害が増加しているという発表がありました。

全ての発表は紹介し切れませんが、各都市がそれぞれの教育事情の中で、さまざまな取り組みをしていました。各国に共通していたもの、それは、学校現場で「いじめ」の問題や保護者の対応などで苦慮していること。移民や少数民族に対する差別の問題、特別に支援を要する子どもたちの支援の在り方の問題などでした。それらを解決する取組が「ともに生きよう ちがいをこえて」というテーマに迫っていたことです。

19 年前に改定された川崎市の外国人教育基本方針が先駆的だったのは「多文化共生の社会をめざす教育は、日本人と外国人の間だけに限らず、あらゆる人が、相互の違いを認め合い尊重し合い、ともに生きていく力になるように展開しなければならない」とし、それぞれの違いが豊かさとして響き合う人間関係を創り出していくことが大きな目標として掲げられていたことです。19 年経った現在の川崎市のブランドメッセージ「Cloros,Future!」にもつながる人の在り方の基本だと思っています。(M・Y)